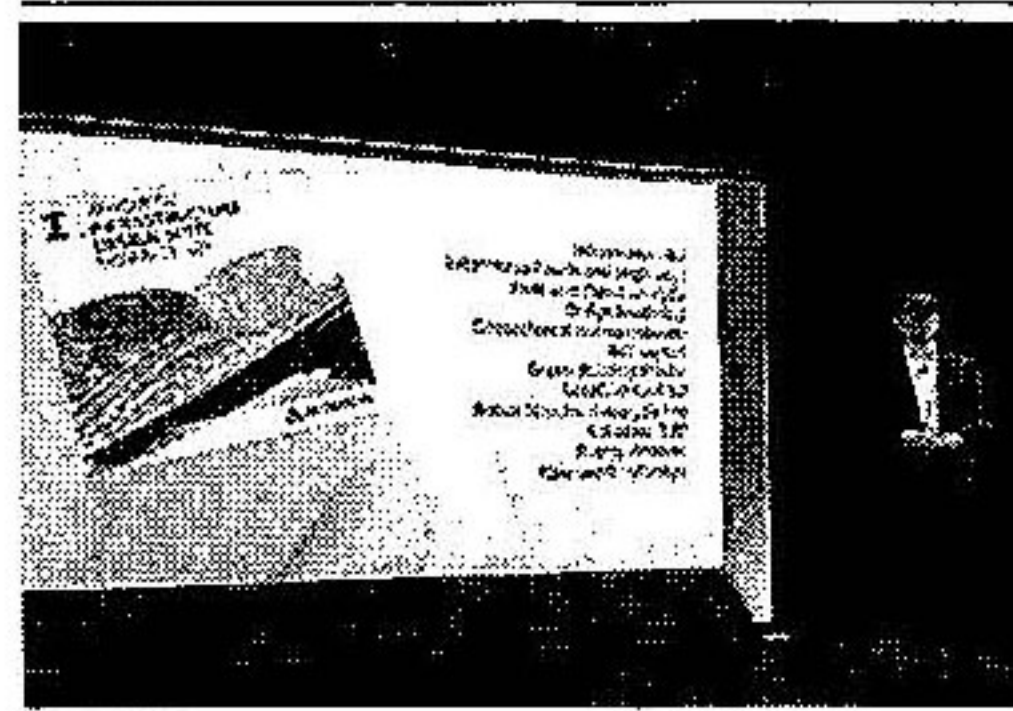


オートデスク

スイート製品強化

5日に建築、土木向け



オートデスクは、BIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）、CIM（コンストラクション・インフォメーション・モデリング）ツール需要の多様化に伴い、複数製品をパッケージ化した「スイート」製品を強化する。

6月5日に建築向け「オー

トデスク・ビルディング・デザイン・スイート2014」と土木向け「同インフラストラクチャー・デザイン・スイート2014」を発売する。発売の背景として「建築・土木の設計・施工者の業務範囲が拡大に対応しているため」と近藤伸一技術営業本部ソリューションスペシャリストマネージャーは説明する。写真。例えば、今後拡大する建築改修では、設計専用ツールだけでなく、既存建物の2次元図面や3次元点群データを取り込むツールが有効になる。また、地形上に道路ルートを設定できるツールと、詳細に設計・モデリングするツールとの連携が可能になる。

建築積算システム「HEAIOΣ（ヘリオス）」を開発・販売する建築積算専門事務所の日積サーベイ（大阪市）が、BIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）の普及を背景に、大手CADベンダーとの連携を加速している。2011年の福井コンピュータを皮切りに、11年にグラフィソフト、12年にはオートデスクと合意した。生島宣幸社長は「設計時のBIMデータを積算に反映するニーズは急速に広がり、戦略的に各社との結び付きを強めてきた」と明かす。ヘリオスの優位性を聞いた。

20日に発売する最新版ヘリオス「Ver8.1」では、

オートデスクの「Revit」との連携機能が強化された。

これによって福井コンピュータの「GLOBE」、グラフィソフトの「ArchicAD」を含めた主要BIMソフトとは、標準フォーマット

IFCを介して相互にデータ

ここが聞きたい

HEAIOΣの優位性は？



をやり取りできるようになった。

生島社長は「BIMソフトから取り込んだIFCデータを、ヘリオス内でモデリングした上で積算する独自の算出手法が、異なる3つのソフトそれぞれと連携できた大きな要因」と解説する。例えば床や壁、天井などの面積を算出する場合、起点となる算出位置がそれぞれのBIMソフトによって微妙に異なる。そこ

日積サーベイ社長 生島 宣幸氏

で設計情報をIFCデータに置き換えてから積算情報の部分を抜き出して算出する方法により、各ソフトで生じる誤差を調整することが可能になった。

ヘリオスの活用によって、設計データは概算積算だけでなく、実施詳細積算にも反映できる。積算や見積もり作成に費やしていた作業時間は大幅に削減され、作業ミスも軽減する。「設計者は設計途中でも精度の高い概算が可能になり、よりプロジェクトコストを考慮しながら設計できる」と。3社とデータ連携が整ったことにより「新規ユーザー開拓のきっかけにもなっている」という。

設計から積算へのBIM連携

携は、次のステップを強く意識している。「特に施工者にとっては、積算データをそのまま施工図に反映できるメリットは大きい。積算と施工図の連動こそがもっともPRしたい部分。ゼネコンを始め建設会社ではそこがBIMの導入ポイントだ」。既に福井コンピュータの施工図作成システム「J-BIM施工図CAD」とはデータ連携が完了し、実際のプロジェクトで効果を発揮している。

また、ことし4月には、設計から積算へのデータ連携ニーズを受け、BIMのモデリング作成に際して、積算連動がしやすいような指針を策定した。「設計のレベルを

大きく3ランクに区分けしており、この指針に基づいて設計すれば、積算連動の精度が格段に高まる。とはいえ設計はそもそも積算を行うためではない。設計者の負担にならないような配慮の意味を込めて、積算精度が高まる設計のポイントを提示した。既に大手設計事務所を中心に指針の説明を始めており、今後は建設会社にも提案する予定だ。

BIMの普及に呼応するようには、設計事務所やゼネコンでは社内のBIM標準を策定する動きが高まっている。「ヘリオスの補正機能によって、ある程度の積算精度は保てるものの、精度レベルをより高めるにはモデリングに際して、一定の約束事を決める必要が出てくる。設計データを積算に活用する際には、ゼヒルールづくりの参考として、指針を活用してもらいたい」

積算と施工図の連動効果